

この春、中学三年になった由紀は、初めての受験という嵐に立ち向かおうとしていた。気がつくのと、和美たち夫婦にとっても始めての経験だった。

親としてこんな時、何をしたらいいのか分からなかった。

初めての子どもの由紀が、始めて体験することは、それを見守る和美たち2人にとっても、すべてが未知の世界のことだった。子どもを育てるといことは、自らも育つ業のようなものだった。

時代を超えて、延々と繰り返される自分磨きであった。

人は死ぬまで、何度も初めての経験に立ち向かう。

そのドアに手をかけて、その扉を開けて勇気をもって一歩踏み出すか、それを避けるかの選択の自由も持っている。

子どもを愛する心が、2人の心に眠る勇気に光を当てていた。

未知の扉を開け続ける大きなエネルギーになっていた。

和美は、ちよつと甘すぎるなーといつも感じるカフェオレをもてあましながら、自分にはつきりと聞こえるように独り言を言っていた。

「まだ、受験までにはだいぶ時間もあるし、今回の保護者会は、そんなに大事な話じゃないわよ」

都合のいい言い訳ならすぐに出てくる。後付けの理論は人間がもっている最高の能力かもしれない。常に人は自己正当化をしながら言い訳の繰り返しを積み上げているのかもしれない。

それが、クリーニング屋のスタンプカードに溜まるスタンプのように、全部溜まったときにどんな出来事が待っているかも、知らないままに。

「今回は、パパに何とか都合をつけてもらって行ってもらおうと。いつも私ばかりだから、たまには代わってもらわなくちゃ。」

そんな独り言を和美は自分に言い聞かせるように言っていた。

仕事に戻った和美は、由紀と口紅と心に刺さった棘を、いつの間にか忘れていた。

そこに出来た心の隙間に「プロジェクトリーダー」と書き込んでいた。

「プロジェクトリーダーか、・・・」
「これまで結構頑張って来たものね。この辺で神様もわかったのよ。」

その日、和美はいつもより、心なしか胸を張って、歩くスピードが増していた。いつもより少し早く仕事を切り上げて、家路を急いだ。

誰かに、早くこの話を聞いて欲しかった。

人が、誰かに何かを話したいと思う時は、話したい何かが、その人に起きた瞬間。何らかの感情が生まれた瞬間。

話したいことが起きた時に、ただ、それを受け止めてもらうだけでいい。その時、人は尊重されている。大切にされると感じる。その体験の量が、誰かを愛する愛の大きさになる。話を聞いて欲しい時が、とつても話したい時なのだ。

駅前のスーパーで急いで夕食の買い物を済ませた和美は、スーパーの出口で入れ替わるように入ってきた2、3人の中学生とすれ違った。

同じ言葉話し、同じようにつぶれたバックを肩から下げて、みんな同じような顔をしていたことを、和美は気づかなかった。和美の脳は、網膜神経を刺激した映像を、大切なこととして受け取るうとはしなかった。

この時、和美の関心ごとは、中学生という繊細な子どもの視線から、自分のプロジェクトと今日のおかずのことに、周波数を合わせていた。

人生の道のりでは、様々なメッセージがたくさん届く。ただ、それを受け取れるかどうかは、人がその事にアンテナを立てていた

時だけだということ知らなかった。

家庭からちよつとぬけだして、外の世界で仲間を作る少女たちは、同じことがとつても重要だった。

彼女たちは、親も含めた大人に対する感情や、居場所のなさや、不安や、レッテル、評価、言葉、持ち物、行動、すべてが同じ必要があった。

同じであることが唯一安心できる材料だった。

そこへ自分の居場所を見つけて安心したかったのだ。

どんなに粹がっていても、人は人と関わらずして生きていけない。遺伝子が命令するように仲間を探しだす。

壊れやすい自分の居場所を探している。

そして、その自分の居場所でも他から重要であると認められたい。

どんな形であれ、仲間の役に立ち喜ばれたいのだ。

そうして、もう一度大好きな人に目を向けて欲しいと望んでいる。

主観

「ただいまー」

「由紀！誠！」

「そうか、今日は由紀も誠も塾だったはね。急いで夕飯の支度をしなくちゃ」

電気の消えたリビングには、照明の光にてかてか光るポテトチップスの袋が行き場をなくして散らかっていた。

買ってきたフライをそれぞれのお皿にもって、サラダはレタスにキュウリにトマトをいつものサラダボールに入れた。

いつもと変わらない、短い夕食だった。

由紀も誠も同じ方角を向いている。その先には、大きなテレビがあって、司会者がゲストにつつまみを入れて、笑い声が聞こえていた。由紀も誠も笑っていたけれど、二人ともその笑顔を和美に向けてはいなかった。

和美が2人に投げた言葉は、「早く食べなさい」と「残しちゃだめよ」と「学校どうだった？」だけだった。

2人は視線の方向はそのまま、言葉というよりは、なにかの記号のような「うん」と「べつに」を投げ返していた。

「あなた、お茶漬けでも食べる。」

真也に言わせると、部下と飲んできたらしい。真也にとってはこれも仕事だという。確かに責任者の立場にいる真也の大変さもわかる。でも・・・

「いらぬ。今日は疲れたから風呂に入って寝る」

「ねえ、今度の土曜日だけど、私の代わりに由紀の学校に行つて欲しいの、保護者会があつて受験の準備の説明があるらしいのよ。大丈夫でしょ。」

「土曜日・・・無理だ。」

「どうして？」

「土曜は営業所のイベントだ。」

「ちよつとくらい遅れても大丈夫じゃないの」

「バカ言うな。このイベントは今期の勝負どころだ。俺が抜けられるわけないだろう。お前も仕事しているんだから、それくらいわかるだろう。お前が行けばいいじゃないか」

「あのね、今日、金井部長に呼ばれて、今度のプロジェクトのリーダーを任されたの、」

「今後の内の方向が決まる重要な企画なのよ、すごいでしょ」

「私も、やつと今までの頑張りが認められたようで、引き受けたの」

「それで、今度の土曜日、緊急に顔合わせのミーティングが入っちゃったのよ。だからどうしてもダメなの。」

「どうして断らなかつたんだ。由紀の保護者会は前からわかつてたんだろ。俺はとにかく無理だ」

「あなたはいつもそうなんだから。子どものことは何でも私に押し付けて、二人の子どもでしょ、いいかげんにしてよ。いくつ体があつたつてもたないわよ・・・」

2人の視線は、交差することはあつても、決して重なることはなかった。

お互い、言葉に乗せた真実を受け取ることはなかった。自分の主張という。弾を投げ合っていた。

「なんで、私ばかり我慢しなくちゃいけないの？」

「由紀にはお前から話して、内容は誰か他のお母さんからでも聞いとけよ。もう寝るぞ」
「・・・」

ふと気づくとリビングのガラスドアの向こうに由紀がパジャマで立っていた。

「由紀ちゃん、どうしたの？」

「うん、トイレ」

「そう、明日も早いでしよう。早く寝なさい」

「ママ。保護者会来ないの？」

「そうなの、どうしても行かなくちゃ行けない用事が出来てしまったの、内容は麻奈ちゃんママに聞いておくから大丈夫よ。」

「別にいいよ」

「・・・」

由紀が部屋に戻って行った後ろ姿を、うつむき加減で追いながら、和美は何か体も心も持っていかれそうになった。

「どうして・・・」

和美は、後片付けの食器を洗いながら、流せない感情に溺れていた。ただ悔しかった。

排水溝に溜まった残飯がやけに醜いものに見えてきた。

それと同時に、何か大切なものを忘れているようなざわついた風が流れていた。でも、それがなんだかわからない、わかることにおびえているのかもしれない。

ベッドに入って、しばらくは、いろいろなことが頭から離れなかった。由紀のこと、新しく始まるプロジェクトのこと、誠のこと、そして、最後に明日のお弁当のことを考えている頃にやっと意識が薄れてきた。和美にとってのいつのも一日がやっと終わろうとしていた。

始動

「今日は、ありがとうございます。今後もよろしくお願いします。」
エレベーターの前でA社の2人を送り出して、和美は、やっと胃を縛っていたロープが解けたような開放感を味わっていた。

「岡本さん。お疲れさん。」

「部長、ありがとうございます。A社の木村課長、いい人そうで、上手く出来そうです。」

「そうか、それなら安心だ。ところで、最近あまり顔色がよくないぞ、無理をするなよ。それから、今度のプロジェクトチームのメンバーだけど、3人は決めてある。商品開発の河合君と営業の室井君と山口君だ。君のマーケティング部門からの2人は君が推薦してくれ。誰がいいかね。」

「そうですね。川本さんと深井さんでどうですか？」

「川本さんは、キャリアもあって心強いですし、深井さんは山口さんと同期で、若さがあつてチームを明るくしてくれます」

「わかった。それぞれのチーフに私の方から話しておこう。このメンバーの力を上手にまとめ、是非、プロジェクトを成功させよう。」

「まずは、メンバーを集めて顔合わせと、今後のスケジュールを皆に伝えてくれ」

「ハイ、頑張ります。」

部長と別れたあと、和美は1人休憩室によった。

妙にのどが渴いていたのを、思い出した。

「チームか、……。それが仕事だもんね。でも河合さんはちよつとやりにくいな、いつも黙っているの、何を考えているかわからないし……。山口君は元気でどんどん行動するタイプなんだけど、よくミスもするって聞いているし、室井さんはずっと営業畑でちよつと癖がありそうだし、プライドも高そうだし、どうしたらいいんだろう……。――」

考えても答えが出てこないのは知っていた。誰かに相談したかった。でも、誰に……。真也の顔が浮かんですぐに消えた。いや、自分で消したのだ。

真実をはっきりさせるといわずらわしさと交換に、レッテルを貼るといふ安易な解決策を採用していた。人は、その人が自分に見せる一つの顔を見て、その人の全てを評価する。それが自分の思い込みだということを知らずに。

GOAL

巷では、新人類が、みんな同じ黒いスーツに身をまとい、大きなバックを下げ、学生のリズムが抜けてない歩き方で、研修所に飲み込まれていた。

そのころ初めて、プロジェクトメンバー全員が集まるミーティングが開かれた。

和美は、この最初のミーティングが肝心だと思い、睡眠時間という代償を払って完璧に準備をしてきた。

それぞれが自己紹介をした後で、最初に金子部長が今回のプロジェクトが始まった経緯の話と、激励の言葉を15分も話した。言いたいことは言い終えてご満悦の部長が、「あとは岡本リーダーに任せるよ」と言って退出した後、部屋の空気が少し緩んだのを、全員が感じていた。

和美は、用意していたレジメにそって、プロジェクトの目標を皆に話し、それぞれの役割と仕事を伝えた。

プロジェクトの目標は、▶社からの企画書にあった物をそのまま転用していた。誰かが書いた行先にまだ、魂は入っていなかった。

〔プロジェクトの目標は、新商品の初年度売り上げ3億円と新規顧客の開拓〕

最後に、全体のスケジュールを皆に伝えて、最初のミーティングは予定の時間を10分オーバーしただけで無事に終わった。

メンバーから、意見や質問が無いことが、無事と思い込んでいた。

和美は、ほっと一息ついて、安心したのとこれからの進捗に、得体の知れない不安と恐怖を感じていた。何を恐れている、何に不安なのかさえも、まだ明確にその姿を見ることは出来なかった。

これから向かう先が曖昧なまま進むことが、あとで沢山の労力と時間という利息を払うことになるとは知らなかった。目標は、目標であって目的ではない。目的のない目標は人を迷わせる。進む理由が納得できない目標は義務化する。初めて、舟の舵を握った和美は、行先をありありと鮮明に描くことの大切さをあとから知ることになる。

ミーティングが終わって、和美が最後に部屋を出たときに山口が声をかけてきた。

「岡本さん、よろしくお願ひします。僕にとってこんなチャンスめったにないから、気合入れていきます。がんばります。」山口が、会釈の首を置き去りにする形で、廊下を走っていった。

その後ろ姿を、ちよつと引きつった笑顔で見送りながら、後ろの席に座っていた河合の顔を思い出していた。大きな声でガツガツと発言する山口と裏腹に、ほとんど発言しなかった河合が気になっていた。和美の話も何か集中していない。それだけは伝わってきた。

河合と和美は同期入社なのだが、新入社員研修の時少し話した記憶がある程度で、それ以降あまり関係を持つとはしてこなかった。河合のあまり変化のない表情が、和美にとって妙に居心地の悪さを感じさせていた。

「河合君、言葉が少ないからいつも何を考えているかわからないのよね・・・」

「今度、河合君といつかゆつくりと話さなくちゃ。」独り言が和美の後を追いかけていた。

和美は気づいていなかった、「いつか」は永遠に来ないことに。

巷のGWの混雑を感じる間もなく、和美が決めた「いつか」は来ないままに、あつという間に1ヶ月が過ぎていた。5月の紫外線を半そでの先の産毛に、チリチリと感じる季節を迎えていた。

その間に、プロジェクトチームという生き物は、理想の形を嫌がるように水面下で姿を変えていた。それが和美の目に触れた時に、最初の問題が表面化した。

予定よりスケジュールが遅れたのだ。原因はわかっている。

河合がネックになり始めた。

完璧主義の河合は、ある意味マイペースなのだ。それを頑張り屋の山口は気に入らない。山口は行動してから考えるタイプだ。無茶もするけど、それが彼のいいところでもある。山口は同期の深井に不満をこぼす形で、問題の原因を河合に押し付ける同意を取り付けようとしていた。

営業を担当している室井は、個人主義のドライな印象をもたれることが多い。

何事も一歩引いたところで、見ないようにしながら、関心が無いそぶりで他のメンバーとの接点を避けていた。そんなチームのギスギスした空気を一番感じていたのが川本だった。

川本は和美と同じタイプで、チームの調和が乱れることを一番に嫌う平和主義者なのだ。

和美は、チームに亀裂が入りだしたのを知りながら、一人どのようにまとめていいか迷っていた。

悩んでいる時間は、一日の大半を占めるぐらい多いのに、一向に行動に移せない和美だった。

考えと行動のバランスが完全に崩れ、考えは膨らみ不安や恐怖といった見えないうお化けに変わっていった。

行動しない限り、考えたことが、真実の姿を見せていくことを知らずに、自分の想像力に押しつぶされていった。必要以上に結果を恐れて、勝手に作り出した他者評価と自己評価で、自分を信じる事が出来ないでいた。

少しずつチームリーダーとしての自信が崩れだしていた。

そして、時間とともに、確実にチーム内での会話は減りだし、みんなの表情が固まりだした。

逆に反比例するように冷めたメールが飛び交うようになった。確実に警報は鳴っていた。しかし、和美はどうすることも出来なかった。

今、和美にとって一番重要なことは、決断するという行動だけだった。

動機

そんな時、会社がリーダークラスに研修を用意した。受講は任意で希望者する者が受けられる。最近の人事の方策だろう。やらせる研修から、自ら取りに行くスタイルに変えた。

タイトルは「リーダーのコミュニケーションの量と質が、チームの成果を変える。コーチング研修」
和美は、イントラネットでこの案内を見て、メモを取った。

「コーチング研修？」

和美はちょっと慎重派のタイプだった。

何事もすぐには飛びつかない。

コーチングってなに？もう少し情報が欲しい。そう思ったその日の昼休みに、本屋でコーチングの本を買った。一気に読み上げ、なんとなく理解は出来たものの半信半疑だったが、とりあえずその研修に申しこむことにした。

期待はしていなかった。

今までもそうだが、研修というものに疑問を感じていた。

確かに講師の言っている事はもっともだが、現場はちがう。実践では正論で語られるようにはいかないのが常だった。

でも、今の和美はどんなことでもいいので、何か自分のチームをどうにかするヒントが欲しかった。

和美のチームは生き物のように日に日に姿を変えようとしていた。

9月の研修が始まるのがやけに時間が遅く感じる和美だった。

出会い

その人が、本当に必要としている時、その人は現れる。

遅れている入梅を知らせるニュースを聞きながら、子どもたちを送り出し、いつもよりちょっと遅めに家を出た。たった20分くらいの違いなのに、ちょっと世界が違って見える気がする和美だった。いつもと違う通勤電車に乗って、いつもと違う景色を見ながらホテルの研修会場についた。

会場に入って、すでに来ている参加者を見渡して、無意識のうちに知った顔を捜していた。

和美は、知った顔を何人か見つけて、緊張のレベルを少し下げた。

研修のスタートまで10分くらいあった。

飲み物を買うに行く途中で講師の人に会った。

会場で済まそうとすると、元気な「岡本さん、おはようございます」と声が返ってきた。それも笑顔を添えて。

和美は、ちょっとびっくりしたが、悪い気はしなかった。

普段の仕事の関係で触れ合う一瞬とは明らかに違う感覚が和美を包んだ。

例えるなら、幼少のころに初めて友達ができるあのちよつと歯がゆいけど、ちよつと嬉しくて……一言で言うなら「無邪気な気持ち」邪気がない感覚だった。

「でも、なんで私の名前を知っているの？」

すでに受付でネームプレートを着けていた事に気づいたのは、会場のドアを開けようとした直前だった。

「な〜〜んだ」

和美は、手品の種を明かされた子どものように、心が少し晴れる気がした。

たった一瞬の接点、相手がどんな心でこちらに触れてくるか、言葉にならなくてもちゃんと伝わる。

人に対してどんな信念を持っているか、その人が持っている人に対する「物の見方」で相手の反応が変わるのを、和美は無意識で学んでいた。

しかし、その気持ちもこれから始まる未知の不安に押し出されて、ドキドキしながら研修会場に急いで戻った。